

平安中期の「柳のまゆ」考

糸賀 園華^一

一 株式会社クルーク

キーワード：平安、柳のまゆ、柳眉、漢文訓読語

抄録

「柳のまゆ」は「柳眉」の漢文訓読語として和歌や散文にみられる語である。これまで「柳のまゆ」を現代語訳した際、「柳のまゆ」と、そのままであることがしばしばあった。または、「柳」「眉」「繭」や「柳のような眉」「眉のような柳」と結果的に一つの意味に限定した訳が多かった。「柳眉」と「柳のまゆ」の使用例を考察することで、「柳のまゆ」の意味を和歌や散文を通して改めて分析し、新たな解釈の一助とすることが、この小論の目的である。検証結果、「柳」「眉」「繭」の特定にはならず、どれか一つの訳をするよりもその複数の意味を組み合わせたほうが意味に厚みを増せると考える。

はじめに

「柳のまゆ」は「柳眉」の漢文訓読語として和歌や散文にみられる語である。これまで「柳のまゆ」は意味の整理がされておらず、解釈が分かれているように思う。「柳のまゆ」の意味を和歌や散文を通して改めて分析し、新たな解釈の一助とすることが、この小論の目的である。

まず、「柳眉」と「柳のまゆ」の意味を辞書で確かめる。「柳眉」とは、「柳の葉のように細く美しい眉。美人の眉にたとえていう語」^(一)

とある。「柳のまゆ」とは、「①柳の葉、または柳の萌え出た芽を眉に見立てていう。②女性のほっそりした美しい眉を柳の葉にたとえていう。」^(二)とある。つまり、辞書では「柳眉」は「眉」を指し、「柳のまゆ」は「柳」を指す場合と「眉」を指す場合の二通りが示されていることになる。なお、「美人の」や「女性の」と説明されることが多い。これは白居易の『白氏文集』十二・長恨歌「芙蓉如_レ面柳如_レ眉。對_レ之如何不_二淚垂_一」が下敷きになっていることが「柳のまゆ」の各注釈書で指摘される。

検証方法は、「柳眉」と「柳のまゆ」の使用例を考察することであ

る。これまで注目されなかった細かなニュアンスにこだわること、新たな解釈を加えていきたい。

まず、漢詩における「柳眉」を調査した。次に掲げた全調査資料の中から見出せる「柳」と「眉」を含むものうち、「柳眉」と関係する例は全二十二例あり、用例がある場合には資料名の次にその数を示した。

『凌雲集』・『扶桑集』・『本朝麗藻』・『鳩嶺集』・『和漢兼作集』・『性靈集』・『都氏文集』・『菅家文章』・『菅家後集』・『本朝文粹』・『本朝続文粹』・『紀長谷雄漢詩文集』・『翰林学士集』・『新撰類林抄』・『文華秀麗集』五例・『経国集』二例・『中右記部類紙背漢詩集』九例・『田氏家集』一例・『江吏部集』一例・『新撰朗詠集』一例・『本朝文粹』二例・『懷風藻』一例

紙面の制限上、漢詩は、一部の特徴的な例の書き下し文を挙げ、本論の末尾に原文を示した。

次に、和歌における「柳のまゆ」を調査した。調査方法は「新編国歌大観CD-ROM(角川書店)」を使用し、「やなぎ(「あおやぎ」を含む)」と「まゆ(「まよ」を含む)」を一首の中に詠む平安時代中期までの歌集を対象とした。和歌が六首と序文の一例が該当し、歌集名の次にその例の数を示した。

『万葉集』二例・『後撰和歌集』一例・『海人手古良集』一例・『兼輔集』一例・『赤染衛門集』一例・『賀茂保憲女集』の序文の一例

最後に、散文における「柳のまゆ」を調査した。調査方法は「ジャパンナレッジ」(<https://japanknowledge.com/library/>)の検索を使用し、『新編日本古典文学全集』にある作品の中から見出せる「やなぎ」と

「まゆ」を含むものうち、「柳のまゆ」に関係が深いと判断した作品を次に掲げる。ただし、歌集と重複するものは除いた数を示した。

『蜻蛉日記』一例・『枕草子』二例・『和漢朗詠集』一例

以上の例を、次の三つに整理し、述べていきたい。

I 眉の例

II 柳の例

III 繭の例

本文引用の際は、適宜漢字をあてた。

I 眉の例

① 『中右記部類紙背漢詩集』卷十・四七・永長二年三月三日・桃花

唯勸醉・十二首・加賀少掾菅原清能(二)

灼灼たる桃花 何ぞ因有らむ

唯 醉を勧むるに依りて 精神を蕩かすのみ

紅顔は借り易し 成蹊の処

藍尾は催さる 傍岸の辰

梅口 呼ぶを争ひ 頻りに酌みし暮

柳眉 展き難く 独り醒めし春

西郊 遙かに訪ぬ 蘭亭の会

曲水の遺流 鶺鴒詠は新たなり

右の詩は、桃の花が咲く三月三日の宴で、前半に美少年が酒を飲み干せと煽られていることなどが詠まれる。後半の六句に「柳眉」がある。五句と六句は対句になっている。注釈書では「梅口」は、「梅の

ような赤い口もと」(三)と、「菅原道真の「東風吹かば匂ひおこせよ梅の花、あるじなしとて春な忘れそ」の内容を口々に言い合っているもの」(二)としている。後者の和歌と考える理由については、注釈書に明記されていない。また、「呼ぶを争ひ頻りに酌」んでいる人がいることからは、「梅口」が「赤い口もとのような梅」ではなく、「梅のような赤い口もと」と考える。

例①の詩の五句「梅口」との対に六句の「柳眉」がある。六句の「展ひらき難がたく」は、「柳」を指し「柳の葉が芽の状態はまだ葉の開かない様子」、もしくは「眉」を指し「眉が開かず眉間に皺を寄せている様子」と考えられる。宴の場に柳があり、その柳を詠んでいる可能性もある。しかし、私は、右の詩の六句に「独ひとり醒さめし」と続くことから人に焦点があてられ、「柳眉」は「柳」よりも、「眉」を指すと考える。五句の「梅口」と六句の「柳眉」は対句のため、「口」と「眉」というように人の顔の一部分との解釈が適当だと思われる。更に続く七句と八句が、「蘭亭の会」という立派な宴を思い、それに萎縮して詩作が上手くいかないことが六句の「眉」の「展ひらき難がたい理由と解せる。

以上から、「柳眉」は、男性作者の「眉」を主体にし、五句と六句を「(みんな)梅のような口でお互い呼び合って、しきりに酒を酌み交わしています(作詩がうまくいかない)ので私は眉を開けないで(「眉を顰め)一人醒めてしまっています。」と考える。この漢詩の例では「柳眉」が人の眉について比喻したものであることを確認した。

② 『田氏家集』巻下・一四五・春風歌・八韻にして篇を成す。内宴に陪りて、応制の作。(一部抜粋) (三)

氷池玉を貫きて 酒緑の苑し 肆口炉を吹きて 暖灰を擬ふ

畜懐を解却して 梅兒笑く 遺恨を消除して 柳眉開く
 絲桐繚繞として 歌榭を飛ぶ 羅袖飄飄として 舞台を払ふ
 臣六句を過ぎて 五代に陪る 春風殊に合ひて 寒栽を煦む

「畜ちく懐」以下の句と「遺恨」以下の句は対であり、「遺恨」の句に「柳眉」がある。

まず、『田氏家集』の詩の「畜懐」の句、「梅兒笑」の「笑」を「さく」と理解することについて確認する。『懐風藻』に「庭梅ていばいすで已に笑えみを含めども、門柳もんりゅういま未だ眉まゆを成なさず。(八四・一部抜粋) (四)とある。「笑」は「庭梅」をさし、対して「眉」を「成」すのは「柳」となる。「庭梅」が「咲く」ことを、人が「笑」う様子に喩え、「柳」を人の顔の一部「眉」に喩えている。物語の例では、『源氏物語』に「白き花ぞ、おのれひとり笑えみの眉まゆひらけたる。(夕顔) (五)とある。「おのれひとり」は「白き花」が自身のことを指しており、「白き花」が「人」のようになっている。「白き花」は「咲く」が、「人」としての「白き花」は「笑」うように、眉間に寄せられた眉が開くことで皺がなくなり、眉尻も下がった顔となることを表現している。『懐風藻』『源氏物語』の例のように、花が咲く様子と人の顔の様子が重ねられ、「咲」と「笑」は意が通じているといえる。ただし、『懐風藻』と『源氏物語』の例は、花を人格化した例だが、例②『田氏家集』では、人の様子が主体になり、「兒」と「眉」を「梅」や「柳」にそれぞれ喩えている点が注目できる。

例②『田氏家集』「畜懐」の句「梅兒笑く」の「梅が咲く様子」とすると、「遺恨」の句「柳眉開く」は、「柳の葉が芽の状態からその葉を開いていく様子」と「梅」と「柳」の意味で考えられる。また、例

②『田氏家集』「畜懐」の句「梅兒笑く」が「梅を人格化させ、顔が明るくなる（又は笑う）様子」と解釈すると、「遺恨」の句「柳眉開く」が「柳を人格化させ、眉を開いた様子で、実際は眉間に寄せていた柳のような眉を開いた様子」と「顔」と「眉」の意味で解釈できる。

「笑」と「眉」の用例は、『栄花物語』に「内の女房たちうちに、殿あはせたまひて、よろづ思ふ事なげなる御気色けしきの、笑の眉開まゆけさせたまへれば、^(六)とある。この『栄花物語』は、『田氏家集』『懐風藻』『源氏物語』のように花や木がなく、人の「眉」が「笑」う様子を「眉」が「開く」と表現する例といえる。

以上から、私は例②『田氏家集』「畜懐」「遺恨」の句を「冬の間に蓄えた思いを取り除いて、梅の花が咲くように笑顔になり、残る恨みを消し去って、柳の芽がほころびその葉が開くように眉が開いて心配事がなくなります」と「畜懐」や「遺恨」が心情を表す語であるため、人の「眉」を主体とした訳をした。例①『中右記部類紙背漢詩集』と違い、「梅」は「笑く」と「柳」は「開く」とその場に「梅」と「柳」がある情景が想像できる例といえる。

II 柳の例

③ 『万葉集』卷十・春雑歌・一八五三・読人不知（七）

梅の花取り持ちて見れば我がやどの柳の眉し思ほゆるかも

右の例③『万葉集』は「梅」から「柳」を連想する歌である。「梅」と「柳」の組み合わせで詠まれており、例②『田氏家集』のような漢詩の影響がみられる。しかし、例②『田氏家集』や例②で挙げた『懐

風藻』の例には「梅」が「笑」とあつたが、例③『万葉集』には「梅」に「笑」、また「柳」に「展く・開く（ひらく）」がないことが注目できる。

例③『万葉集』四句「柳の眉」について、『歌枕歌ことば辞典』が「柳」の項目でこの歌に対して「柳の眉のような美しいあなたの顔が思われてくることであるよ」^(八)と訳している。また『萬葉集釈注』では解釈に「妻への連想があるかもしれない」^(九)と述べている。しかし、『新日本古典文学大系』のように「柳のまゆ」を「柳」とする解釈が主流である^(一〇)。

確かに、「柳」から「妻」を思い出す例はある。『海人手古良集』九「わぎもこがまゆににたれば青柳のなびくにつけてますなみだかな」^(一一)である。この和歌は、青柳の葉から、その葉の形に似た妻の眉を連想している例といえる。しかし、例③『万葉集』の歌には人を想像する語がないため「眉」の意味はそれほど強くないと思われる。

以上のことから、「梅の花を手にとって見ると、我が家の柳が思い出される。（それは、家にいる眉をもつ妻をも思い出されることだ）」と解釈できる。例②の漢詩に見られた「梅」と「柳」の組み合わせではあるが、この和歌の場合は「柳」の意味が強いといえる。

④ 『後撰和歌集』卷三・春下・九四・よみ人しらず（一二）

春の池のほとりにて

春の日の影そふ池の鏡には柳のまゆぞまづは見えける

右の例④を『新日本古典文学大系』では、「春の陽光を湛える鏡のように美しく静かな池には、何よりもまず柳の眉が映っているのが見

えることだよ。」(二二)と訳し、脚注には「眉のように細い柳の枝を喩えて言う。」(二三)とある。つまり、四句にある「柳のまゆ」を「眉」とする理解である。池を鏡に喩えることは漢詩的な表現であり、「池」を「鏡」に見立て、その「鏡」に映る「眉」となる。

例④『後撰和歌集』四句の「柳のまゆ」は、「柳」を指す可能性がある。「鏡」のような「池のほとり」に実際に生えている「柳」があり、「池」の水面にその「柳」が映っていると考えられる。陽光で光る池を鏡に喩えて、鏡を人が覗き込む様子を連想しているという理解である。

私は詞書「池のほとり」から主体を実際にある「池」と「柳」であるとして「春の陽光を湛える鏡のような池の水面にはほとりの柳が最初に映る。それは、鏡を覗くとまゆ眉が見えるようだ」と、見立てた「鏡」とその「鏡」に映ったであろう「眉」を示した。漢詩表現から「眉」の理解があることは確かだが、「池のほとりにある柳が眉に似ている」という情景から、「柳」そのものが詠まれていると思われる。

III 繭の例

⑤ 『兼輔集』一〇(二三)『和漢朗詠集』卷上・春・一一二・貫之

屏風に

青柳のまゆにこもれる糸なれば春のくるにぞ色まさりける

まず、二句「まゆにこもれる」について述べる。近しい歌語に「繭ごもり」がある。「繭ごもり」とは、辞書に「蚕が繭の中にこもること。転じて、少女などが深窓にこもること。」(二)とある。「繭ごもり」

の用例は平安時代まで例⑤の和歌を除くと『万葉集』に三首のみである(二四)。この中の一首に「たらつねの母が飼ふ蚕の繭隠り隠れる妹を見むよしもがも(巻十一・二四九五)」がある。このように「繭ごもり」では「蚕」と、人である「妹」が重ねられる。つまり、「まゆ」の語に「繭」の解釈が可能となる。『万葉集』「繭ごもり」の例の「蚕」と「繭ごもり」から、この例⑤『兼輔集』のような「糸」の縁語を読む和歌が発生したと思われる。

例⑤『兼輔集』の掛詞を確認すると「はる」に「春」と糸を「張る」、「くる」に春が「来る」と糸を「繰る」(＝紡ぐこと)がある。「まゆ」に「眉」ではなく「繭」の意味があるとすると、「糸」「張る」「繰る」と糸に関係する語が続くことになる。『万葉集』「繭ごもり」の例のように「繭ごもり」と理解すれば「こもる」も糸の関わる語になり、さらには糸を染めるという意味では「色」「色まさり」も糸から連想する語といえる。つまり、「糸」の縁語で「繭」「張る」「繰る」が成立するのである。

『万葉集』に先行して『日本書紀』に「願の上に粟生り、眉の上に繭生り、眼の中に稗生り、」(二五)とある。「眉」を「繭」に見立てた例ではないが、「眉」と「繭」は関連づけられる語であるといえる。また、『日本書紀』では、『万葉集』「繭ごもり」や例⑤『兼輔集』のように「繭」に「こもる」と続けないことから、「繭ごもり」という語ではない「まゆ」に、「眉」と「繭」の解釈の可能性があると思われる。

「繭」は、漢詩の影響から離れたところで「繭」と「眉」の同音「まゆ」によるものと考えられる。もしくは、殿上眉や高眉のような引眉と蚕の「繭」が似ていることから生まれた表現の可能性もある。

以上のことから、例⑤『兼輔集』を「青柳の芽にこもっている柳の葉が開くように繭にこもっている糸ならば春が来ると繰る糸の柳の青色が濃くなるのだろうか」と解釈できると考える。この歌は例①②のような「眉」に対する「展く・開く（ひらく）」がなく、また『万葉集』「繭こもり」の例のような「妹」という人の存在が読み取れないため、「眉」の意味は薄いように思われる。対して「糸」「張る」「繰る」「色」とあり、糸の縁語として「繭」の意味が強くでた和歌といえる。

⑥ 『蜻蛉日記』中巻（安和二年）一三〇・さぶらひ（二六）

しりへのかたのかぎりこゝにあつまりてならず日、女房にかけ物こひたればさるべき物やたちまちにおぼえざりけむわびざれに青き紙を柳の枝に結びつけたり。

山風のまづこそふけばこの春の柳の糸はしりへにぞよる

かへし口々したれどわするゝほどおしはからなむ。ひとつはかくぞある。

かずかずに君かたよりて引くなれば柳のまゆも今ぞひらくる

この場面は、安和二年（969）三月二十日頃、作者の夫兼家に仕える者たちが二組に分かれて小弓の試合をすることになったのに対し、後手組みが道綱母邸で練習をしたことを書いたものである。賞品を求められた道綱母の女房たちは適当な品が思い浮かばず「山風の」の和歌を送り、従者の「さぶらひ」から「かずかずに」の返歌が来る。「柳の枝に結びつけ」て贈っていることから「柳」がその場にあることは明白である。また、「かずかずに」の和歌の五句に「ひらくる」とある。このように漢詩の①②の例にみた「展く・開く（ひらく）」

があり、「眉」の意味を思わせる。その一方で「山風の」の和歌の四句「柳の糸」を受けた「よりて（繕りて）」「引く」は「糸」の縁語と考えられ、「繭」の意味があるように思われる。

この例⑥『蜻蛉日記』の和歌については、次の二つの議論がされてきた。一つ「愁眉」の意味があるか、二つ「眉」は誰の眉なのかである。これまで「かずかずに」の和歌を、「愁眉」の意味をくみ「いろいとみなさま方が味方となって引き立ててくださっているそうですから、柳の芽が開くように私たちの愁眉もやつと開きました。」（二六）とされてきた。しかし、「柳の眉」——「開く」の組み合わせはあるが「愁眉」——「開く」の組み合わせの用例はないため、愁眉の意味がないという斎藤菜穂子氏の論がある（二七）。他に「愁眉」に「開く」は無いが「柳眉開く」の意味とのかけ合わせたとの久保木寿子氏の論がある（二八）。そして、「愁眉」の意味の有無に関わり、眉の指す人物にも解釈が分かれ、従来の作者「さぶらひ」の眉とする説（二九）に反対し、柳眉に男性の例がないため「さぶらひ」を否定した「女房」の眉であるという斎藤菜穂子氏の論がある（二七）。

私は「かずかずに」の和歌を、「さぶらひ」が作者で主体の、「色々」と皆様方が味方となって（＝頼りにして）引き立ててくださっているそうですから、繭から繕った糸を引いたならば繭のような柳の芽が開くように私の眉もやつと開きました」と解釈する。「眉」と「柳」の両方の意味、例⑤『兼輔集』のように糸の縁語による「繭」の意味として、この和歌は複数の意味をとると考えた。私訳には反映していないが、「柳眉」ではなく「愁眉」の意味がある可能性が指摘されたのは、「柳眉」という漢文訓読語であるためであり、漢文訓読語ゆえの訳の困難さが表れた例といえる。

⑦ 『赤染衛門集』四〇〇・赤染衛門（一九）

範永が母の、春ごろ糸をこひたりしを、「けがらひたることありしころ、今この程過ごして」といひて後忘れて、七月七日思ひいでてやるとて

なにをして柳のまゆを忘れけんけふたなばたの糸にひくまで

この歌は詞書から、範永の母が、春ごろ糸を下さいと願ったのを、「今は不浄なことがあったころですから、今はこの時期を過して」と言った後忘れてしまつて、七月七日に思い出して糸をやるといふので詠んだ歌であることが分かる。

詞書に「糸をこひたりし」、和歌の五句に「糸に引く」とある。また詞書に「七月七日」、和歌に「たなばた」とあり、「まゆ」を糸と関わる「繭」の意味と解釈することができる。「七月七日」は曆上、秋であるが、糸を請われた春の景物である柳も想像ができる。さらに、この和歌では例⑦『蜻蛉日記』のように「範永が母」の「秋眉」を解釈の中で触れる『和歌文学大系』がある（一九）。

以上のことから、「どうして（糸のような）柳を愛でる春の頃に、（範永の母から）「繭から引かれる糸が欲しい」と言われていたことを忘れたのでしょうか。今日織女星が機織りに糸を引く日まで。きっと範永の母も眉を鬨めて困っているわ。」と解釈できると考える。例⑤同様「繭」の意味が強く出ていると思われる。ただし、例⑤『兼輔集』では「まゆにこもる」とあり、『万葉集』の「繭ごもり」からの影響がみられた。この和歌は「こもる」がなく「糸」の縁語がみられる「繭」の意味の例といえる。

⑧ 『賀茂保憲女集』の冒頭序文、異本にある四季歌の序の一節（一九）

野辺には白妙の褻衣着たる人々、筐を引き下げて若菜摘む。柳の眉広げたり。かほ鳥心のまゝに遊ぶ。水は鏡にしたれど、なにかは恥づかしきことのあらむ。

この序文は長大であり、意味が取りにくいため全体の意味は割愛する。

右の序文では、例①②⑥のような「眉」―「開く・展く（ひらく）」とは異なる「広げたり」とある。

右の例⑧『賀茂保憲女集』序文の「柳の眉広げたり」は、まず「柳」意味で理解された。『賀茂保憲女新注』に「柳は眉のように枝をたわませ広げている」^(二〇)とある。つまり、「柳の枝についた葉が開いていくことで枝を広げていく様子」との理解である。または「柳の葉が芽の状態から葉を広げていく様子」とも考えられる。さらに、天野紀代子氏は、賀茂女が、「柳の芽が萌え出る季節の到来を「柳の眉広げたり」と言い表している」^(二一)とし、「柳」の理解を示している。「広げたり」の類似の言葉に「ひろごりて」があるが、これは『源氏物語』「ひとむら薄も頼もしげにひろごりて（柏木）」^(二二)の例のように「ひろがる」の古い形として「繁る」という意味がある。「柳」が「広げたり」とすることで、「柳」が緑豊かな様子を表現したと思われる。

次に「眉」の理解である。例④『後撰和歌集』の「池」を「鏡」に見立てた用例のように、「水は鏡にしたれど」とある部分に「水」を「鏡」に見立てた漢詩の影響があり、例①②のように人の「眉」との理解もできる。例⑧『賀茂保憲女集』では「若菜」を摘む「白妙の褻

衣着たる人々」がいることで「眉」の意味の可能性がある。

三つ目に「繭」の理解である。久保木寿子氏は、「新芽の隠もる「柳の繭」が開き加減になってきた事実を指すと同時に、「柳の眉」を掛けることにより、簡潔な一節が語戲的なおかしみを内包しつつ、訪れた春の解放感を醸すことになる」(二八)と述べ、「繭」と「柳」の意味があるとしている。つまり、蚕の繭に似た柳の繭が開き、柳の新芽という意味の柳の眉が開いてきた、と二重の比喻をしているとの理解である。

以上から糸の縁語がみられず、「繭」については、「眉」に比べて意味が弱いように思われる。しかし、例⑤『兼輔集』で触れたように「眉」と「繭」の「まゆ」の同音から連想したか、もしくは「柳の葉が芽の状態」と「蚕が繭にこもっている様子」から連想した可能性はある。例⑧『賀茂保憲女集』序文を、「野辺には真つ白な普段着を着た人々が、籠を引き下げて、若菜を摘む。そこには(若菜を摘む人の眉が広がるように繭の形の)柳が葉(又は枝)を広げている(繁らせている)。かお鳥が心のままに遊ぶ。(若菜を摘む人々は、眉を広げて心配事がなく晴れ晴れとした気持ちなのだから、)水を鏡のようにして顔を映しても、何が恥ずかしいことがあるか」と解釈できると考える。「広げたり」については、次の『枕草子』に⑨「ひろごりたる」⑩「ひろごりて」の例がある。

⑨ 『枕草子』第三段・正月一日は(三三)

三月三日は、うらうらとのどかに照りたる。桃の花の今咲きはじむる。柳などをかきこそさらなれ。それもまだ、まゆにこもりたるはをかし。ひろごりたるはうたてぞ見ゆる。

これは、正月一日、七日の若菜摘み、八日、十五日の粥の棒で打つ行事と宮中の様子を記した後に続く箇所である。

「桃の花」に次いで「柳」が登場する。例①『中右記部類紙背漢詩集』でも「三月三日」の宴であり、「桃」が一句にあった。「桃」と「柳」は、『万葉集』松浦河の序「花のごとき容かおならひな双た無く、光てるれる儀すがた匹たぐひ無き。柳の葉を眉まゆの中に開き、桃の花を頬ほの上に発ひらく。」(二四)にも、この組み合わせの例がある。この『万葉集』松浦河の序では「柳の葉」と「眉」、続いて「桃の花」と「頬」が関連した語になっている。「花のごとき容」と顔が花のように華やかであることを述べ、柳眉が美人の眉を指すことからその人の眉は柳のように美しいこと、その頬の色の鮮やかさを桃の花にして表現している。他に、『万葉集』四二一六番歌「桃の花紅色にほひたる面輪おものうちに青柳の細き眉根まゆねを笑えみ曲まがり朝影見つつ(一部抜粋)」(二五)という長歌がある。「面輪のうちに」とあり、「桃の花」のような顔の中に、「青柳の細き眉根」という顔の一部である「眉」の意味があると思われる。

例⑨『枕草子』「まゆにこもりたるはをかし」とあり、その反対に「ひろごりたるはうたて」と評している。この「こもりたる」という語は、『万葉集』の「繭まゆこもり」が下敷きになっていると思われる、糸の縁語がなくとも「繭」の解釈が可能である。木村初恵氏は、柳が「まゆにこもりたる」という表現について、「柳の新芽が眉に似ているのと、蚕の繭とにかけたもの。」(二六)とする。

久保木寿子氏は『枕草子』と『賀茂保憲女集』について、『枕草子』は、「他の景物を捨象する態度において、賀茂女四季序にみられるような典型化作用を経ているものと思われる。が、「柳眉を開く」との

掛詞的興味には向かわず選択した景物に専一に注意を傾け、「うたて」の感懐に及ぶまでに観察的弁別的である。抽象性の勝る類聚章段が見せる僅かな具象表現である」(二八)とした。広がった柳の芽に対し、『賀茂女集』ではその事実のみを記し、一方『枕草子』では「うたてぞ見ゆる」と寸評を加えたという解釈を述べている。

斎藤菜穂子氏『枕草子』三段について、「柳などをかしき」とは和歌の伝統を受けて、「糸のような柳の若枝が伸びてきた様子を指す」と述べ、それ故に「繭」をあげ、好ましいとしている。「ひろごりたる」は、「繭」が糸を多く引き出される形が崩れて広がることと、同音の「まゆ」により「柳の眉」という細くあるべき葉や若芽が徐々に育つことよって幅広になることを重ね合わせているのであり、それを「うたてぞみゆる」と指摘するのが、和歌の類型的表現を対象化する『枕草子』の独自の着眼点であるとした。春の柳について、「繭にこもっている」と表すことが『枕草子』の頃には散文表現として読者に理解されていたのではないかと指摘する(二七)。

「ひろごりたる」は例⑧『賀茂保憲女集』のように柳が「繁っている」との理解も可能であろう。その繁った様子と「眉」が手入れされずにボサボサになっている様子とを重ね、それ故に「うたて」つまり、不愉快であるとしたのではないだろうか。

以上から、例⑨『枕草子』「三月三日節供の日は、うららかにのんびりと日が照っている。桃の花がちょうど咲きはじめてところ。柳などのおもしろい風情は言うまでもないことだ。その柳もまだ、柳の芽が(眉に似た繭に蚕が籠っているように)籠っているのはおもしろい。一方で柳の葉(又は枝)が広がっているのは(手入れのされていない眉みたいなので)不愉快に見える」と解釈できると考える。

⑩ 『枕草子』第二八二段・三月ばかり物忌しにとて(三三)

三月ばかり物忌しにとて、かりそめなる所に人の家に行きたれば、木どもなどはかばかしからぬ中に、柳といひて、例のやうになまめかしうはあらず、ひろく見えてにくげなるを、「あらぬものなめり」と言へど、「かかるもあり」など言ふに、

さかしらに柳のまゆのひろごりて春のおもてを伏する宿かな
とこそ見ゆれ。

第二八二段は、三月、清少納言が物忌みのために仮の宿で過ごしたことを記している。

この段で「柳」を「ひろく見えてにくげなる」と述べ、「かりそめなる所」の「柳」を見ている状況と思われる。「さかしらに」の和歌は、柳が広がって春の面目をつぶしている宿を詠み、訳の中で「柳のまゆ」部分は「柳のまゆ」とされるか、「柳」の意味での解釈がされた。

第二八二段「さかしらに」の和歌の三句「ひろごりて」について述べる。例①②⑥のように「眉を開く」は、心配事がなくなり物事が良くなることを指す言葉であったのに対し、『枕草子』では「ひろく見えてにくげなる」としている。これは例⑨でも「ひろごりたるはうたて」としているように『枕草子』の中で一貫している。「にくげ」「うたて」のように悪いとするのは、「眉を開く」の通常の用法と異なる。つまり、清少納言は「柳のまゆ」が「ひろ」がることを良しとしないのである。以下、三つの解釈の可能性と合わせて述べる。

一つは、「柳」の解釈である。「柳」の「細い柳が美しい」という前提から、その「柳の葉(枝)が広がったことよって幅広になっ

るのは美しくない」との考えである。または、例⑨で述べたように「ひろごりて」を「繁る」の意味で解釈できる。「葉が幅広になり繁っている様子」もしくは「枝が広がって木の全体が繁っている様子」と考えられる。つまり、「柳」について「柳の葉(枝)が広がっているのは春の良さが台無しだ」という解釈である。

二つ目は、「眉」の解釈である。「眉が開く」とは「心中の心配事などがなくなり、晴れ晴れした顔つきになる」ことである。これを踏まえた考えである。ただし、『枕草子』には「開く」の語がないため、漢詩の「展」から理解する。例①に挙げた『中右記部類紙背漢詩集』では「柳」と共に「展」を使用した用例が「開」と同程度であった。「展」は「ひろく」の他に「ひろげる」の意味がある。「柳の眉―展く」とし、「展」の訓読で「広げる」とした解釈である。「開く」ではなく漢詩文で使用された「展く」を使い、「ひろく」ではなく「ひろげる」と清少納言が表現を工夫した可能性である。「眉を開く」が良い意味であることを知った上で敢えて逆のことを書いているということになる。また、『万葉集』では「細き眉根」とあり、柳同様、眉も細い方が好まれたようである。本来は抜いて整えられるべき眉が「ひろく」くなっているのは、整えられず美しくないといえる。このことから、細い眉に対して広い眉、太い眉を指して「にくげ」としたのではないだろうか。つまり、「(一般的には)眉が広がれば心配事もなく、晴れ晴れとした気持ちになり、良くなるというけれど、(私)清少納言が思うには)柳の葉が広がってボサボサ茂っているのは整えられていない眉みたいで春の良さが台無しで良くない」となる。清少納言の独特の感性による表現とする理解である。

三つ目は、「繭」の可能性についてである。前後に糸の縁語などが

ない場合でも解釈が可能である。例⑨でも「繭」を形の類似から解釈できる可能性は触れた。しかし、他の意味に比べ「繭」の意味は弱いように思う。

第二八二段の前後を含めて解釈すると、「物忌みのための仮住まいの場所として行った先では、これといって取り立てていうものがない中、柳があった。だが、見るとその柳は、優雅ではなく、葉が幅広に見えて醜く「まるで別の木のようなだ」と言う」と「こんな柳もある」と言われた。一般的には(繭に形が似ている)眉が開けば心配事もなく、晴れ晴れとした気持ちになり、良くなるというが、この仮の住まいの柳は逆に柳の葉が広がってボサボサ茂って(整えられていない眉みたいで)柳も春の良さも面目をつぶしている。と思ったのであった。」と考える。このように「さかしらに」の和歌「柳のまゆ」に注目することで、解釈の幅が広がったといえる。

まゆ

「柳のまゆ」は「柳」「眉」「繭」の意味が存在し、その意味は明確な線引きがされておらず、また和歌の修辞法掛詞や比喻表現を経て複雑化したと考えられる。この複雑化した意味は時代を経るごとに変化したと思われる。「柳」と「眉」については、どちらかが主体となり意味をとる場合、両方の意味が並列的になる場合がある。「繭」の意味については、糸の縁語がみられる「繭ごもり」から、糸の縁語から離れ「眉」と「繭」の音、もしくは「眉」に似た形状ということから「繭」の意味と独立したと思われる。

これまで「柳のまゆ」を現代語訳した際、「柳のまゆ」と、そのままであることがしばしばあった。また「柳」「眉」「繭」や「柳のような眉」「眉のような柳」と結果的に一つの意味に限定した訳が多かった。

検証結果が「柳」「眉」「繭」の特定にはならなかったことは、その意味の可能性が時代を経て広がっていったことを示し、どれか一つの訳をするよりもその複数の意味を組み合わせたほうが意味に厚みを増せると考える。

以上、「柳のまゆ」という語のみの検証となったため、この意味の広がりが漢文訓読語独特のものかについては検証しておらず、課題として残る。

謝辞

大妻女子大学文学部日本文学科教授柏木先生にご指導戴いた。ここに深謝の意を表する。

本研究の一部は大妻女子大学人間生活文化研究所、大学院生研究助成 (B) によった (DA2602)。

引用文献

- 〔一〕編：日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典第二版』一九七二年、小学館
- 〔二〕中村璋八『中右記部類紙背漢詩集』二〇一一年、汲古書房
- 『中右記部類紙背漢詩集』巻十・四七・永長二年三月三日桃花唯勸醉

十二首加賀少掾菅原清能

灼灼桃花何有因。唯衣勸醉蕩精神。紅顏易借成蹊处。藍尾被催傍岸辰。梅口争呼頻酌暮。柳眉難展独醒春。西郊遥訪蘭亭会。曲水遺流觴詠新。

〔三〕監修：小島憲之『田氏家集注 卷之下』一九九四年、和泉書院

『田氏家集』巻下・一四五・春風歌八韻成篇、階寛平二年内宴、応制作。

風為號令聞先訓。八節周旋皇政媒。加物無偏又無黨。施人如去卻如來。搖揚逐日從箕宿。養長隨時應震雷。就裏三方非有意。只須珍重自東迴。冰池貫玉宛綠酒。肆口吹爐擬暖灰。解卻畜懷梅只爰。消除遺恨柳眉開。絲相繚繞飛歌樹。羅神飄飄拂舞台。臣過六旬陪五代。春風殊合煦寒栽。

〔四〕小島憲之『日本古典文学大系69 懷風藻・文華秀麗集・本朝文粹』一九〇六年、岩波書店

『懷風藻』八四 五言。春日左僕射長王が宅にして宴す。一首。

日華臨水動。風景麗春輝。庭梅已含笑。門柳未成眉。琴樽宜此處。賓客有相追。飽德良爲醉。傳盞莫遲遲。

〔五〕阿部秋生・ほか『新編日本古典文学全集20 源氏物語①』一九九四年、小学館

〔六〕中山裕・ほか『新編日本古典文学全集31 栄花物語①』一九九五年、小学館

〔七〕小島憲之・ほか『新編日本古典文学全集8 萬葉集③』一九九四年、小学館

〔八〕片桐洋一『歌枕歌ことば辞典 増補版』一九九九年、笠間書院

〔九〕伊藤博『萬葉集釈注 五』一九九六年、集英社

- 〔二〇〕佐竹昭広・ほか『新日本古典文学大系4 萬葉集四』二〇〇三年、岩波書店
- 〔二一〕片桐洋一・ほか『新注和歌文学叢書4 海人手古良集新注』二〇一〇年、青簡舎
- 〔二二〕片桐洋一『新日本古典文学大系 後撰和歌集』一九九〇年、岩波書店
- 〔二三〕菅野礼行『新編日本古典全集 和漢朗詠集』一九九九年、小学館〔兼輔集』に注釈書がなく『和漢朗詠集』と本文同一のため『新編日本古典全集 和漢朗詠集』を挙げた。〕
- 〔二四〕小島憲之・ほか『新編日本古典文学全集8 萬葉集③』一九九四年、小学館
- 『萬葉集』卷十二・二九九一
- たらちねの母が飼ふ蚕の繭隠りいぶせくもあるか妹に逢はずて
- 『萬葉集』卷十三・三二五八／三二五九
- あらたまの年は来去りて玉梓の使ひの来ねば霞立つ長き春日を天地に思ひ足らはしたらちねの母が飼ふ蚕の繭隠り息づき渡り我が恋ふる心の中を人に言ふものにしあらねば松が根の待つこと遠み天伝ふ日の暮れぬれば白たへの我が衣手も通りに濡れぬ
- 反歌
- かくのみし相思はざらば天雲の外にそ君はあるべくありける
- 〔二五〕小島憲之・ほか『新編日本古典文学全集2 日本書紀①』一九九四年、小学館
- 〔二六〕上村悦子『蜻蛉日記解釈大成 第3巻』一九八七年、明治書院
- 〔二七〕斎藤菜穂子『蜻蛉日記』中巻の「柳の糸」と「柳のまゆ」の贈答歌考―「眉」と「繭」の掛詞をめぐる―（『國學院大學紀要』
- 二〇一二年、五〇巻、六五―七八。）
- 〔二八〕久保木寿子『賀茂保憲女集』四季序の位相―同時代仮名散文との接点から見る―（『白梅学園大学・短期大学紀要』二〇〇八年、No. 44、一―一八。）
- 〔二九〕武田早苗・ほか『和歌文学大系20 賀茂保憲女集／赤染衛門集』二〇〇〇年、明治書院
- 〔三〇〕渦巻恵『賀茂保憲女集新注』二〇一五年、青簡舎
- 〔三一〕天野紀代子「歌から散文へ―賀茂保憲女集」序を読む―（『古代中世文学論考』二〇〇三年、九、一九七―二一九。）
- 〔三二〕阿部秋生・ほか『新編日本古典文学全集23 源氏物語④』一九九六年、小学館
- 〔三三〕松尾聰・ほか『新編日本古典文学全集18 枕草子』一九九七年、小学館
- 〔三四〕小島憲之・ほか『新編日本古典文学全集8 萬葉集③』一九九四年、小学館
- 松浦河に遊びし序
- 余暫松浦の県に往きて逍遙し、聊かに玉島の譚に臨みて遊覽せしに、忽ちに魚を釣る女子らに値ひき。花のごとき容双無く、光れる儀匹無き。柳の葉を眉の中に開き、桃の花を頬の上に発く。（略）
- 〔三五〕小島憲之・ほか『新編日本古典文学全集8 萬葉集③』一九九四年、小学館
- 『萬葉集』卷第十九・四二一六・詠二霍公鳥并藤花、一首并短歌
- 桃の花、紅色にほひたる面輪のうちに青柳の細き眉根を笑み曲がり、朝影見つつ少女らが手に取り持てる真そ鏡ふたがみ山に、この暮れの、繁き谷へを呼びとよめ、朝飛び渡り夕づく夜かそけきのへには

ろはるに鳴くほととぎすたちくくとはぶれに散らす藤浪の花懐か
み引きよちて袖にこきれつしまばしむとも

ほととぎす鳴くはぶれにも散りにけり盛り過ぐらし藤浪の花

〔二六〕木村初恵『枕草子』の漢詩文に関する一考察」（『国文学論叢』
一九九二年、第三七輯、一一―一四）

（受付日：二〇一九年一月十四日、受理日：二〇一九年二月一日）

糸賀 園華（いとが そのか）

現職：株式会社クルーク

大妻女子大学大学院人間文化研究科言語文化学専攻日本文学、修士課
程修了。

修士論文は『賀茂保憲女集』研究―『枕草子』との重なりを中心
―。現在は一般企業に勤めながら、平安時代の歌集『賀茂保憲女集』
を中心に研究を行っている。

Heian middle term [Yanagi no Mayu] theory

Sonoka Itoga¹

¹Klug co., Ltd.

Park Axis Shibuya-jinnan, 10F 6-20 Udagawa-cho, Shibuya-ku, Tokyo, Japan 150-0042

Key words : Heian, Yanagi no mayu, Ryubi, The Japanese pronunciation language of the Chinese classics